報告

石造美術研究の六十年
おりおりの記(二)

軸丸勇
（会員　宇目町大字千束）

磨崖仏について

大分県は石仏の宝庫とよく言われる。日本の中世石造文化地域を大約してみると、関東・関西・瀬戸内海沿岸にまとめることが出来る。大分県はその西端に位置し、中国や朝鮮半島との交流、関東・関西は勿論東北すなわち藤原文化などとの交流も考えられ、いわば正統派に属する文化圏である。

宇佐神宮や天台修験道による宗教集団の活躍、大友氏をはじめ武士団の転廃などによる伝播、あるいは移入などの影響によるものであって豊後独自のものではないと思われる。

また加工に容易な阿蘇山系(両子系)凝灰岩の膨大な堆積層に恵まれ、其の石に対して不滅の神秘性、それにつれ多くの石工を擁していたという素地的な好条件が、時の権威のもとに、あるいは一般民衆の下に、各時代を通じて衰えることなく工作されたものである。一般の石材工作は石器時代から始まり、古墳時代には石槨の構築があり、家形石棺に施した直弧文の装飾をはじめとし石人、石馬、線刻絵画など非常に芸術的価値の高いものが多い。

七世紀頃の太宰府都府楼をはじめ、建造物の礎石(宇佐地方)、基礎基壇、山城の石塁、九州北部に見られる多くの神護石などがあり複雑化してくる。またその作風においても地区毎の特質がある。

平安時代に入って仏教文化の浸透にともない、石の素材として美術的要素を多分に含んだものが現われてくる。中には時代年号、銘文など時代の背景を鮮明に刻したものが多い。(以上、岩尾順「豊後磨崖仏」参考)

少し前置きが長くなったが、この辺で本題に入ることとしたい。一般に石仏といわれるが、厳密にいえば磨崖仏と石仏とは区別すべきであると思う。石を素材とした

仏像彫刻であるという点では共通するが、移動させることが出来たり、其の周辺を回って見ることの出来るものと、自然の岸壁や巨大な岩塊の表面に彫刻したもので、前方から観察することは出来るが、其の箇所から切り放さないかぎり移動させることの出来ないものとがある。

磨崖仏とは後者に用いられる言葉であり、石仏とは石を素材とした仏像彫刻を総括する言葉といった方がよいと思う。

ここでは磨崖仏を対象にして、主として具象的な造形として仏像を彫刻したものについて述べる。

県内に存在する磨崖仏は約七十六箇所、仏教的彫刻像の総数は四百体を越えるものがあり、そのうち三分の一は国指定の史跡または特別史跡及び重要文化財の二重指定になっているもの、あるいは県指定もしくは市町村指定遺跡となっており、全国の主要な磨崖仏の大半が大分県内に所在すると言っても過言ではない。

これら磨崖仏の所在地は「県北部宇佐・国東地区」、「県中部大分・大野地区」、「県南部臼杵地区」と大きく三地区に分けられ、其の地区ごとに所在の形態が異なり、またその作風においても地区毎の特質がある。

（県北部地区）

豊後高田市熊野磨崖仏、西国東郡真玉町福真・堂の迫の磨崖仏、宇佐郡安心院町椿本磨崖仏などは、山間幽翠の地になかば孤立的に所在し、その技法上の彫りの肉付けに薄肉のものが多く、そのほとんど天然の岸壁に露出し、はじめから風雨にさらすことを意図しており、此の地区の彫像の形態上の特色は、全体的に面長であり、風貌の荒々しいものが多い。

（県中部地区）

大分市の周辺には、旧国府の所在地で豊後風土記にも記された碩田（おおきた）の地、稲作豊饒地帯にあって弘安図田帳にいう稙田（わさだ）庄、現在の東稙田地区の高瀬磨崖仏、その西の口戸磨崖仏、そして南大平寺の磨崖仏がある。

大野川流域の犬飼磨崖仏、大迫磨崖仏、大化磨崖仏、普光寺磨崖仏、緒方宮迫東西磨崖仏、これらの磨崖仏は大野川沿いの交通上の要衝であったと思われる所に位置している。また神角寺を要として扇形に広がり、大野地方を守護するかのごとく配置されているように見える。

これら県中部の磨崖仏は、ほとんどが丸彫りに近い状

態で厚肉に彫られているが、中には薄肉のものが混じっている。

大分市元町磨崖仏や滝尾の曲磨崖仏、さらに大野川流域の磨崖仏の中には、地石の不足した部分を別石で作ったり、粘土で加工した、いわゆる木彫り技法と塑像技法とを併用したものがある。

大迫磨崖仏などは最初から覆屋を差しかけて、風雨を防ぐ意図のもとに作られている。像は全体的に丸顔で中高い容貌のものが多い。

（県南部地区）

県南部は臼杵地区に集中的に多数の磨崖仏が彫られ、しかも石造彫刻の域を脱し、木造彫刻を見る感さえある。ホキ、堂ヶ迫磨崖仏群の上には岸壁に幅約三〇㌢前後の溝が彫られ、排水に考慮した跡がうかがえる。一部には覆屋が掛けてあったと思われる痕跡が認められる。

これらの磨崖仏の作者については、歴史上の確実な記述資料は何一つとして残されていないのが実情である。県北部が「仁聞菩薩」、県中部は「日羅」、県南部は「蓮城法師」であると伝えられている。

これらの伝説的作者についてはいろいろの説があるが、小野玄妙博士は其の著書「大乗仏教芸術史の研究」に「大分・佐賀両県下の石仏」と題する論文を発表し、その中に「仁聞菩薩の事跡と其の造像」して一つの見解を示している。「その所在せる地区が中央の近畿と掛け離れていた為か、又は純粋な僧徒でないという事から、僧史・僧伝の類いに其の名を見ない。大体奈良時代の始めに支那から来た帰化人であって、逸早く真言密教を伝えて不動法等の修法を行い、多くの石窟仏像を造顕したものと認めたい」と述べて、実在した人物と見ている。これに対し浜田耕作博士は「豊後石仏の研究」のなかに「史的人物と見ることはできない」と否定し、中野幡能博士も「宇佐八幡信仰の研究」のなかで「仁聞菩薩」について次のような非実在説をとっている。「八幡三神は応神天皇、神功皇后、比売の三柱であるが、八幡信仰は比売神信仰から始まり応神天皇と神功皇后が後に加わったものである。応神天皇の八幡大菩薩に対し、女神二柱を神母菩薩とし、この神の母、すなわち神母が、ニンモ、ニンモン、人聞となったもので、元来、比売信仰は母神信仰に由来しており、人聞菩薩信仰は平安時代に始まり、以後、比売神も八幡宮の司祭たちをもすべて人聞

と称するようになった。八聞とは八幡神そのものを人格化したものである。

日羅については「日本書紀巻二〇」敏達天皇十二年の条に同人についての記事はあるものの、豊後の日羅とは時代も異なり別人のようである。

蓮城法師については、三重町「蓮城寺古記」や「豊鐘善鳴録」や「真名長者実録」等では、長者小五郎が中国天台山に金三万両を献納したので、その返礼使として派遣された僧と述べているが、真偽のほどは不明である。

要するに、地方仏教文化の開発は地方豪族と結び合った僧団の事業であったから、それを象徴するものとして、これらの名前が作られたのであろう。

史的背景として、永承年間から末法の世に入ると信じられ、藤原氏をはじめ多くの貴族達の間には、死後の安楽を願い造寺、造仏、埋納経などが異常なまでも行われた事実を考える必要がある。

竹越峠（たけのこ）

弥生町と津久見市の境にある峠。彦岳西方一・五キロ余にあり、鏡峠と同じ尾根のうえに並んでいる。佐伯市と津久見市を最短距離に結ぶ峠である。標高四一〇メートル。

江戸期には佐伯藩士の巡視は鏡峠の官道を通っていたが、一般庶民は低くて近いこの峠を通ったという。

明治以降は佐伯も津久見も竹越峠の方が耕作道路として手入れが十分なため、通行人が多くなり、大正五年（一九一六）ごろまで三軒の茶店もあり、便利で鏡峠を通る人はなくなったという。

「大分県道路管内図」には、この峠路を主要地方道佐伯津久見線として明示しているが、通行不能区間で長い間まぼろしの県道であった。

しかし、峠下に平成五年（一九九三）には彦岳トンネルが完成し、県道佐伯津久見線は全面開通した。

（『弥生町誌』）